『蓑虫説』における「蓑虫」の意味

黄　東　遠

はじめに

本稿は、素堂によって貞享四年（一六八七）に作られた『蓑虫説』における「蓑虫」の意味につき、主として和歌・連歌・俳諧などの先行文芸と比して、どのような新しさや特徴を持つものであるかを追究するものである。まず和歌・連歌・俳諧（『蓑虫説』以前）における「蓑虫」の意味を検討した上で、『蓑虫説』における「蓑虫」の意味を探っていきたい。

一、和歌・連歌における「蓑虫」

最初に和歌における「蓑虫」について見ていく。『蓑虫説』が成る以前、「蓑虫」の語が用いられた歌は、管見では、重複歌を省くと、次の二〇首である。[1]

おなじ院の御前にて、まゆみのもみぢに
みのむしのかかりたるを、うたつかまつれとあるに

1　もみぢばのえだにかかれるみのむしはしぐれふるともぬれじとやおもふ
（頼基集・一九）

とあるを、九月ばかりにおなじ人につけて、
丁子をみのむしにつくりて、その中に御ふみ

2　露のみのむしきえざればこころみよかりのはかぜにとひやおとると
（斎女御・一八一）
あて宮

3　かくれたるみかさの山のみのむしは花のふるをやぬるといふらん
（宇津保・一一九）
仲忠女房

4　あめのあしはむらさめなるをみのむしとなにむつかしくかけていふらん
（宇津保・九七二）
蔵の人

5　あさゆふひてりてかかやくおほ殿になくべきものかげにやみのむし
（宇津保・九七三）
みのむし

6　春雨のふるにつけつつみの虫のつける枝をば誰かをりつる
（兼輔集・二三）

やなぎにみのむしのつきたるをみて

7 みのむしになるをみるみる青柳のいとにのみよる我が心かな　（和泉式部集・五一三）

8 雨ふらば梅の花がさ有るものを柳につけるみのむしのなぞ　（和泉式部集・五一四）

9 ふるさとのいたまにかかるみのむしのもりけるあめをしらせがほなる　（秋篠月清集・二八〇）

10 春雨のふりにし里をきてみればまくらのちりにすがるみのむし　（拾遺愚草・七七九）

11 我がせこがこぬだにつらき風の音にさこそはなかめ秋のみのむし　（宝治百首・二八九七）

冬風　延喜六年定文家歌合樹雨寒風　読人不知

12 霜がれのうゑきにやどる風の音をあめとやえだにさわぐみのむし　（夫木抄・六六二五）

蓑虫　松にみのむしのつきたるをすけちかおこせたりける　祐挙

13 いかでかは露にもぬれん雨ふれどもえしがいその松のみのむし　（夫木抄・一三一四四）

返し、祐挙家集歌　読人しらず

14 みのむしのやどれる松のもとよりやぬれじと人はたのみそめけん（夫木抄・一三一四五）

家集、虫　源仲正

15 みのむしのすがる木の葉も落ちはててつく方もなき秋のくれかな　（夫木抄・一三一四六）

同　寂蓮法師

16 ちぎりけむをぎのこころもしらずして秋風たのむみのむしの声　（夫木抄・一三一五〇）

後京極

17 ふるさとの軒ばにかかるみのむしのもりけん雨をしらぬがほなる　（六華集・一八一一）

永正五四御月次

18 あはれいかに木の葉にすがるみの虫の身のかくれがも風は吹くらん　（雪玉集・一〇五三）

寄虫恋

19 はかなしなしづが爪木にみの虫のわが身をからす契ばかりは　（松下集・二三三）

延宝九年、五月二十日下河辺長流、みの虫を

20 みのむしのつけるははそのかた枝に猶ちちのなきことやなくらん　（晩花集・四九六）

1から8までは平安朝、9から19までは中世、20は江戸時代に詠まれた歌である。但し、1の歌は、後に中世の勅撰集である『新千載和歌集』に「亭子院御時御前にめして、まゆみの紅葉にみの虫のかかりたるを題にて歌つかうまつれとおほせ事ありければよめる／紅葉ばの枝にかかれるみの虫は時雨ふるともぬれじとや思ふ」という形で収載されている。従って、「蓑虫」を詠んだ和歌の中で勅撰集に収められたものはこの一首ということになる。ここからは「蓑虫」が一般的な和歌の素材ではなかったことが窺える。

次に、和歌における「蓑虫」の詠まれ方を見てみる。何より目立つのは、軽く通り過ぎる「しぐれ」(1)、俄に激しく降ってくる「むらさめ」(4)、静かに降る「春雨」(6)、「もりけるあめ」(9)などといった多様な雨と取り合わされた「蓑虫」である。しかも、その「蓑虫」は、「しぐれふるともぬれじとやおもふ」(1)、「露にもぬれん雨ふれども」(13)、「もりけん雨をしらぬがほなる」(17)のように、雨が降っても平然として居られる姿、または雨に身が濡れない虫として捉え続けられる。なお、実際に降る雨でないとしても雨に見立てた散る花や植木に吹く風とともに詠まれた「蓑虫」の例(3)(12)も見られる。いずれにせよ、「蓑虫」の「蓑」の語の連想から雨と取り合わされることへと繋がっていったと考えられる。また、「もみぢばのえだ」(1)、「まくらのちり」(10)、「木の葉」(15)、「ふるさとの軒ば」(17)などに「すがる」あるいは「かかる」蓑虫の伝統も確かめられるが、朝日に夕日に照り輝いている大殿には、蓑虫のような虫は鳴くはずものではない、と詠まれている例(5)を見る限り、「蓑虫」は華麗なイメージを持つ「おほ殿」のような邸とは相容れない歌材であったということが出来る。そこには塵・芥から成る「蓑虫」の殻の外見の質素なイメージが働いたのであろう。

そして「みかさの山のみのむし」(3)、「梅の花がさ」(8)のように、「かさ」とともに組み合わされた「蓑虫」の例も平安朝の歌に見られる。漢詩文に「蓑」または「蓑笠」の語（「千山鳥飛絶　萬逕人蹤滅　孤舟蓑笠翁　獨釣寒江雪」柳宗元、「江雪」）が「隠者」「世捨て人」としての意味を持って頻出する影響によるのか、「かくれたるみかさの山のみのむし」(3)、身を「かくれ」ようとする「蓑虫」の例(18)も確認できた。また、本来鳴かない蓑虫は、『枕草子』に、「みのむし、いとあはれなり。鬼の生みたりければ、親に似てこれもおそろしき心あらんとて、親のあやしききぬひき着せて、『いま秋風吹かむをりぞ來んとする。まてよ』といひおきて、にげていにけるも知らず、風の音を聞き知りて、八月ばかりなれば、『ちちよ、ちちよ』とはかなげに鳴く、いみじうあはれなり。[2]」とあることから、鳴く虫とされ、「おほ殿になくべき」ものではない「蓑虫」(5)、「えだにさわぐみのむし」(12)、父の居ないことで鳴く「蓑虫」(20)のように、その鳴くさまが詠まれている。そして『枕草子』において、「蓑虫」が父に捨てられたり、「ちちよ、ちちよ」とはかなげに鳴くと記されたせいであろうか、恋と関わると、「いとにのみよる」心細い心(7)や「わが身をからす」契(19)、または「蓑虫」の鳴き声を通して「わがせこ」が来ないので辛い思いをする女心(11)などを表す歌材として受け継がれてゆく。また、言葉遊び的な「物名」として捉えられた「蓑虫」の例(2)も見られる。

以上のように、和歌に見られる「蓑虫」は、「蓑虫」の「蓑」の語の連想によって種々の雨と密接な関係をもって組み合わされ、それらの雨に平然と耐える虫あるいは雨にも身が濡れない虫として詠み継がれてゆき、かつ雨に見立てた散る花や植木に吹く風とともに詠まれていた。また、紅葉ば・枝などや質素なイメージを持つ場所に「すがる」または「かかる」虫として捉えられたり、「蓑」の縁語である「笠」の語と取り合わされて

「かくれる」属性を持つ虫として詠まれたりした。恋と関わる場合は、「かなわない恋」「辛い恋」を表す歌材となり、また、本来鳴かない「蓑虫」は、『枕草子』の影響によって鳴く虫とされ詠まれていたことが明らかとなった。

次は連歌における「蓑虫」について見てみる。「蓑虫」を詠んだ連歌の例の最初のものは、管見の範囲では、平安期勅撰集である『金葉和歌集』に収められた、

みのむしのむめのはなのさきたる
枝にあるを見て　津師慶暹

A　むめのはながさきたるみのむし
まへなるわらはのつけける
あめよりはかぜふくなとやおもふらん

であった（引用は『新編国歌大観』による。歌番号661）。これは、梅の花笠を着た蓑虫を詠んだ前句に対し、雨に対しての備えが万全な蓑虫は、「雨よりも、花を散らす風よ、吹くな」と思っているだろう、というものである。これを除いた連歌作品は、『菟玖波集』『新撰菟玖波集』『竹馬狂吟集』『新撰大筑波集』にもその用例が見えず、管見の範囲で確認できたのは、次の二例のみである。[3]

さしてかほるは梅のしたかげ　英阿

B　蓑むしはつゞりを春の衣とや　宗砌

ひとむら雨のあとはかすみき　金阿
（宝徳四年（一四五二）成、『宝徳四年千句』「はなぞころ」の巻）

いつまでちりを出ざらん身ぞ　聴雪

C　蓑虫のかくれずとてもしられめや　宗碩
しほるゝ花の春雨の暮　宗長
（大永四年（一五二四）成、『伊庭千句』「やまさむみ」の巻）

Bにおける宗砌の句は、連歌寄合集『連珠合璧集』に載る蓑虫の寄合が「梅の花かさ」「雨」とあるように、前句の「梅」から「蓑むし」を連想し、さらに「蓑むし」から身を包んでいる殻を連想して「つゞり」を寄せ付けたと思われる。「つゞり」とは布切れなどを継ぎ合わせた粗末な衣服、また、そのような袈裟、法衣を指す語であるから、蓑虫の殻が与える粗末なイメージが、「つゞり」への連想に働きをしたと解される。さらに、金阿の付合は、前句の「蓑むし」から「雨」を連想し（『連珠合璧集』）、春雨が降った後の大気の霞んでいる景を付けたのである。また、Cにおける宗碩の句は、「出家する」という意味を持つ前句の「ちりを出ざらん」から「かくれず」と付け、さらに「かくれず」から「蓑虫」を思い寄せ、蓑虫は身を隠さないとしても人に知られるだろうか、いや、知られはしないよ、と付けたものである。一句を前句と合わせた場合、「塵を出づ」からは塵から成る殻から蓑虫が出る姿と、俗世間を離れて「出家する」という意味を同時に汲み取れる。さらに、宗長の付合は、前句の「蓑虫」から「花」と「春雨」とを各々連想し（『連珠合璧集』）、春雨が降った後の夕暮れの情景を付けたものであ

る。季節としては、A、Bが「梅の花」「春の衣」という春の季の言葉とともに詠まれ、Cもまた付句に「春雨」が出るなど、春の季と結びつくものとして詠まれている点が注目される。『枕草子』に影響された鳴く蓑虫の例はない。

「蓑虫」は多詠されなかった題材であったらしく、三例しか検討出来なかった。しかし、先に検討を加えた『金葉和歌集』『宝徳四年千句』『伊庭千句』における「蓑虫」からは、「蓑」の縁語である「笠」の語と取り合わされて「雨に対してもその備えが万全な虫」、または「粗末な服を着ている虫」「出家する」「隠れる」「雨が連想される虫」としての詩的イメージをもって詠まれていたことが看取できた。特に「蓑虫」の「出家する」「隠れる」ことからは、広義に考えて「隠者」としてのイメージが窺える。その「隠者」としてのイメージおよび雨と関連づけられた「蓑虫」は、先に見た和歌における「かくれ」る「蓑虫」や「雨」と組み合わされた「蓑虫」の伝統と繋がる。それらの「蓑虫」の詩的イメージを含めて、室町時代の連歌の手引であり、連歌用語辞書として広く読まれた『藻塩草』（古活字版、巻十二）の「蓑虫」の条に、「蓑虫の聲」「鬼の子」「みのむしのすがるこのは」と紹介されたことなども合わせて考えると、連歌における「蓑虫」は和歌における「蓑虫」の伝統を受け継いだものと言えるであろう。

以上、和歌・連歌における「蓑虫」について検討してみた。因みにいうと、中国の漢詩文[4]及び俳諧師たちが好んで読んだり引用したりした謡曲[5]には、「蓑虫」の用例が見当たらない。が、『林羅山詩集』[6]（巻第五十七）に「蓑蟲」と題された、「簑袂蠢然唯恠哉（タヽカナ）　恰モ如シ二釣叟ノ立ツカ一江隈ニ　曾テ聞ク戰蟻ノ避ルヲ二風雨ヲ一　今見ル微蟲ノ撲チレ雪ヲ來ルヲ」の一首が見られる。「蓑虫」を「恰モ如シ二釣叟ノ立ツカ一江隈ニ」と比喩し、漢詩文における「蓑」あるいは「蓑笠」の伝統に沿って、川の隈で釣竿を垂れている漁翁・隠者の姿に見立てたものである。但し、この一首は、和歌で詠まれていた松虫・鈴虫・金虫・玉虫・轡虫・蓑虫・毛虫・油虫などのような虫を漢詩化する試みの中で詠まれており、漢詩において、「蓑虫」が一般的に詠まれるものであったわけではないと考えられる。

二、俳諧における「蓑虫」―『蓑虫説』以前

次に、貞享四年（一六八七）『蓑虫説』以前の俳諧における「蓑虫」について見ていく。「蓑虫」を詠んだ俳諧作品としては、次の三例が見付かった。[7]なお、発句作品は、管見の範囲では見られなかった。

ア　家を出てや身をらくにせん
　　蓑虫は古木の枝にふらめきて　　重頼
　　帋袋こそやぶれ果けれ
　　（寛永一〇年（一六三四）成、『犬子集』所収、付合）

イ　わけてさびしき五器の燒米　　清風
　　みの虫の狂詩つくれと啼ならん　　芭蕉

忠に死たる塚にイム　　嵐雪

（貞享二年（一六八五）成、「涼しさの」百韻）

手習そまず角入てより　　孤屋

ウ　親は鬼子は口おしき蓑虫よ　　其角

折かけはらん月の文月　　野馬

（貞享四年（一六八七）刊、『続虚栗』所収、付合）

アは貞門・談林時代の「蓑虫」、イ、ウは芭蕉とその門流における「蓑虫」の例である。貞門・談林時代を合わせて一例しか見られないことからすると、「蓑虫」は和歌・連歌の場合と同じく、広く取り上げられる素材ではなかったことが窺える。

蓑虫の付合は「家」「家を出る」「ふらめく」（『俳諧類船集』）である。そのため、アにおける重頼の句は、前句の「家を出てや」から付合として「蓑虫」を連想し、そこから古木の枝に「ふらめいて」いる蓑虫の様子を取り合わせたと考えられる。「家を出る」、つまり「出家する」意味を持つ蓑虫は、先に連歌における「蓑虫」について検討した折に明らかに出来た、「出家する」「隠れる」との蓑虫のイメージと通じるものであり、なお「ふらめいて」いる蓑虫の姿も和歌で検討した「すがる」あるいは「かかる」との「蓑虫」の伝統と繋がる。そして、イにおける清風の句は、人に分配したために微量の焼米しか入っていない寂しい食器の有様を表したもの。一句に見える「さびしき」は「わけて」と「五器」とに関わる。それに芭蕉が、その「さびしき」体に相応じるものとして「みの虫」を思い寄せて、あの蓑虫は狂詩を作れと鳴くのであろうか、と付けた。前句の焼米を人に分けた人物を、蓑虫の鳴音を聞く風狂人として設定し直したのである。一句における鳴く蓑虫は、『枕草子』や和歌の伝統に根ざしたとはいうものの、「父よ、父よ」と鳴くはずの蓑虫を「狂詩つくれ」と鳴く虫に換えたところが、先行文芸には見られない新しさと言えよう。阿部正美氏が「『父よ父よ』と啼くといはれる蓑虫を『狂詩つくれ』と啼くといひ做して俳諧にしたまでである」[8]と指摘されたのも、結局、「狂詩つくれ」という表現における新しさを言おうとしたものと考えられる。また、ウにおける其角の句は、前句の「角」から「鬼」を連想し、そこから鬼の子とされる「蓑虫」を寄せ付けたと思われるもの。一句は『枕草子』に載る蓑虫の話をパロディ化し、鬼の子であるゆえに親に捨てられたり、または鬼の子と呼ばれたりする蓑虫に対する哀れみを詠んだものである。

以上のように、『蓑虫説』以前の俳諧における「蓑虫」の詩的イメージは、芭蕉の付句に風狂人に似つかわしいものとして捉える新しさが窺われるものの、全体としては「すがる」「かかる」「鳴く」「出家する」という和歌・連歌の伝統に基づき、それらを生かしたものであったことが確かめられた。

三、『蓑虫説』における「蓑虫」

貞享四年（一六八七）に成る『蓑虫説』『蓑虫説跋』をめぐる素堂と芭蕉との唱和は、両人の交流の中でも最も興じ合った

ものの一つである。この唱和が成る経緯については、子光編『素堂家集』[9]によって知られてきた。概ね次のとおりである。

貞享四年、芭蕉が『鹿島紀行』の行脚から江戸に帰り、素堂の庵を尋ねた際、素堂が芭蕉を蓑虫に見立てて「簑蟲やおもひしほどの庇より」と挨拶句を詠み、さらに園中を散歩中に、竹の小枝にぶら下がっている蓑虫を見付けて、「みのむしにふたゝびあひぬ何の日ぞ」と興じて芭蕉に贈った。これに対して、芭蕉からはそれに応じる「簑むしのねを聞に來よ草の庵」との唱和があり、さらに素堂が芭蕉の句に応えて作ったのが『蓑虫説』であった、という次第である。

後に、素堂から『蓑虫説』を贈られた芭蕉は、『蓑虫説』に対する『蓑虫説跋』を成して興じている。

ここには「蓑虫」を中心とした、互いの風雅を理解し合う両人の心の交響を見ることが出来る。特に注目されるのは、素堂の「簑蟲やおもひしほどの庇より」「みのむしにふたゝびあひぬ何の日ぞ」の発句が、これまでの俳諧の発句作品には見られなかった「蓑虫」を、他の季語と取り合わせずに単独で用いていることである。近世前期に読まれていた歳時記の「蓑虫」の条には、「蓑虫雑也。なくとすれば秋也。蓑に折をきらふ也。」（『御傘』）、「蓑虫、藻に住むしなども、音になくとしてハ秋なり。他准之」（『無言抄』）と載る。但し、この句は、芭蕉への挨拶句として作られたものであり、ここでの「蓑虫」は季語として用いられたというよりも、芭蕉の旅姿の見立てとして用いられていると考えられる。

『蓑虫説』は、のち宝永三年（一七〇六）刊、許六編『本朝文選』に収められて「蓑虫」の新しい詩的イメージを世に広めることとなる。

本稿では現存する『蓑虫説』十一本の中、自筆頭注が付され、素堂が「蓑虫」に託そうとした意味をより具体的に読み取れると思われる『蓑虫説』（天理図書館蔵、書名目録には「蓑虫記」とある。訓点は底本のまま。）を底本にし、注釈書としては弥吉菅一氏の「蓑虫説」[10]（『俳句講座』・5、「俳論・俳文編」所収）と、村松友次氏の「蓑虫説」[11]（新編日本古典文学全集『松尾芭蕉集』・2所収）とを参考にして検討を加えることにする。また、素堂自筆頭注についても、適宜引用しながら触れることにする。

【一】みのむし〳〵、聲のおぼつかなきをあはれぶ。ちゝよ〳〵となくハ、孝にもつぱらなるものか。鬼のうミすてぬればおそろしなど、清女が筆のさがなしや、よし鬼の子なり共、瞽叟を父として舜あり。汝ハむしの舜のらんか。

【二】みのむし〳〵、聲おぼつかなくて、かつ無能なるをあはれぶ。松むしハ聲のうるはしきがために、籠中に花野をしたひ、桑子ハ糸をなすにより、からうじて賤の手に死ス。

【三】みのむし〳〵、静なるをあはれぶ。胡蝶ハ花にいそがしく、蜂ハ蜜をいとなむがために往來をだやかならず。誰が為にこれをあまくするや。

【四】みのむし〳〵、かたちのすこしきなるをあはれぶ。わづかに一葉うれば其身をおほひ、一滴をうれば其身をうる

ほす。龍虵のいきほひあるも、おほくハ人のために身をそこなふ。しかじ汝がかたちのすこしきなるにハ。

【五】みのむし〳〵、蟷螂のいかりなし。あに蝸牛のあらそひあらん。糸をひけ共蜘蛛のたくみなし。其糸をたつさへたるありさまハ、漁翁の雨の江にたてるに似たり。漁翁ハ得ものをわすれず。渭水の翁すら文王を釣のそしりをまぬかれず。だれかいふ、駟馬の事ハ、むかし一簑の風流に及はず。

【六】みのむし〳〵、玉むし故に袖ぬらしけん。田簑の嶋の名にかくれずや。いけるもの誰が此まとひなからん。遍昭の簑のしぼりたまふハ、古妻を猶わすれざればなり。

【七】みのむし、春ハ柳にすがりそめて櫻がちりにまじはり、秋ハ荻ふく風にねをそへて、紅葉のはやしにかくれ、やゝ古枯(本)の後はうつせミに身を習ふや、からも身もともにするつるや。

【八】簑蟲々々　適逢二園中一　従容トシテ侵レ雨　飄然トシテ乗スレ風ニ　白露甘レシ口ニ青苔掩レ躬ヲ　天許作(エルシテ)ナシレ隠ト　我憐呼レ翁ト　諫メ二啄コトヲ野鳥ニ一　制スニ拂フヲ家童一ニ脱ニ簑衣ヲ一去テ　誰知ニ其終一

【一】における「蓑虫」は、素堂の自筆頭注に「清少納言みのむし父よくとなく（下略）」とあるように、『枕草子』を踏まえながら、声の弱々しくて微かなところに趣を感じるとし、その理由として、親に捨てられたにもかかわらず、「父よ、父よ」と親を慕って鳴く孝を尽くす虫であることを語っている。さらに、『史記』[12]（「五帝本紀」）などに載る、愚昧で善悪のけじめも見えない瞽叟に孝を尽くした帝王舜を引用し、蓑虫よ、お前も孝においては虫の中の「舜」というべきではなかろうか、と再び蓑虫の孝たることを強調する。和歌では、蓑虫の「鳴く」こと自体に重点が置かれ詠まれていたが、ここでは「孝」を表わす媒体となっている点に新しさがある。

【二】における「蓑虫」は、【一】において趣を感じるとされた「蓑虫」の声の弱々しくて微かなところに、さらに「無能」なることが趣として加わっている。そして、「蓑虫」の声の弱々しくて微かなところは、籠の中に閉じ込められる羽目に遭わせる松虫の「聲のうるはしき」と対比される。さらに、「蓑虫」の「無能」さは、賤しい百姓の手によって、死を迎えさせる蚕の「糸をなす」という才能と対比される。しかし、「蓑虫」の声の弱々しくて微かなところは、松虫の才能である「聲のうるはしき」とも対比されるのだから、ある意味では、「無能」さも表していると言える。【二】における「蓑虫」は、「無能」なるがゆえに人に害されないもの、言い換えると、「能」に勝るものとして捉えられたのである。

【三】においては、「静」なることが「蓑虫」の趣とされている。そして「静」なる「蓑虫」と対比されたものが、花から花へと忙しく飛び回る胡蝶と、蜜を集めるために行き来が穏やかならぬ蜂である。もちろん、【三】において、「蓑虫」の「静」なることは、「蓑虫」の身動きの「静」なることを示しているのだが、その「静」なる言葉の裏側には、胡蝶のように飛び回ることも、そして蜂のように蜜を集めることも出来ない「蓑虫」

の意味も存する。すなわち、「蓑虫」の「無能」さという意味も含まれている。そのため、ここにおける「静」と、【二】においての生き延びるもととなる「無能」さとは相通じるものといえなくはない。そして、このように「静」と「無能」さとを相通じる意味として捉え、さらに、「静」と寿命とを結びつけた考え方は、次にあげる『荘子』の一節と共通する。（『荘子』の引用にあたっては『荘子虚齋口義』[13]を用い、筆者に読み下しにした。傍線も筆者による。）

虚ナレバ則静ナリ。静ナレバ則動ク。動ケバ則得タリ。静ナレバ則無為ナリ。無為ナレバ則事ニ任スル者責アリ。無為ナレバ則兪兪タリ。兪兪タル者ハ憂患モ處ラル事能ハズ。年壽長シ。　「天道篇」

『荘子』の寓話には、「無為」が「無才」「無能」の意味としても説かれている。そのため、【三】における「蓑虫」の「静」なることも、【二】における「無能」さも、同じく『荘子』を源とするもの、またはそれと共通するものと言わなければならない。

【四】における「蓑虫」は、「形の小さい」ところに趣を感じるとある。その「形の小さい」蓑虫は、強い勢いを持ったために命が害される「龍」「蛇」と対比され、それがゆえに誰も気に留めない、天から授けられた命を全うすることが出来るという虫とされている。さらに「蓑虫」は「形の小さい」ために、木の葉一葉だけでも身を覆えるし、また一滴の水にでも身を潤せる美徳をも持っている。一見つまらなく見えるものが天寿のままに生きるという思想（「山木篇」に載る大木など）、そして小さい物に自足するかあるいは価値を認めるという思想（「逍遙遊篇」に載る、深林に巣を作っても一枝に過ぎないという鷦鷯と河の水を飲んでも満腹するほどに過ぎないという偃鼠の話を引用した許由の寓話など）は、『荘子』では、その例を数え切れないほど確かめることができる。

【五】における「蓑虫」は、次に挙げた『荘子』に載る寓話を下敷きにして「蟷螂のいかりなし。あに蝸牛のあらそひあらん。」といい、自身の能力を過信して車轍に立ち向かう蟷螂の無謀さと蝸牛のようなつまらない争いをする性がない虫として捉えた。

汝夫ノ蟷螂ヲ知ラザルカ。其ノ臂ヲ怒ラシテ以テ車轍ニ當ル。其ノ任ニ勝ヘザル事ヲ知ラザルナリ。是レ其ノ才ノ美ナル者ナリ。之ヲ戒メ之ヲ愼メ。積伐美ナルトスル者以テ之ヲ犯サバ、幾シ　「人間世篇」

戴晉人曰ク、所謂ユル蝸ト云者有リ、君之ヲ知ルヲヤ。曰ク、然バ、蝸ノ左角ニ國スル者有リ、觸氏ト曰フ。蝸ノ右角ニ國スル者有リ、蠻氏ト曰フ。時ニ相與ニ地ヲ争ヒテ戰フ。　「則陽篇」

蟷螂の話は、相手の権威を犯すと、そのために危険な目に遭い、死ぬことさえもありうる、という教訓的な意味として挙げられている。また蝸牛の話は盟約を破った威王に恵王が刺客をやって殺そうとした時、戴晉人が恵王に対して戦争を引き起こ

す原因を作る必要はないという寓話として載る。が、この二つの寓話は、『荘子』全篇を通じて考えるとき、「造化」または「無為」に反するものの例として各々挙げられている。したがって、蟷螂・蝸牛のような性がない「蓑虫」は、「造化」あるいは「無為」に順応する虫となる。そして、「蓑虫」は糸を引いても蜘蛛のような巧みがない虫と捉え、【二】の「無能」、または【三】の「静」なる「蓑虫」と似通う属性を再三強調する。また、糸を引く様を、雨の降る江に立っている漁翁のようなものに見立てた。漁翁に見立てたところは、先に述べた『林羅山詩集』に見える「蓑虫」の隠者的なイメージと共通する。そして「渭水の翁すら文王を釣のそしりをまぬかれず」の箇所には、「白氏文集　昔渭水ニ有レ翁釣テレ人ヲ不レ釣レ魚七十而得文王」と付された自筆頭注にあるように、次の『白氏文集』[14]（巻之六）所収、「渭上偶釣」に詠まれている漁翁・隠者として名高い「太公望」を意識したことが明らかである（読み下し文及び傍線は筆者による）。

渭上ニテ偶釣ル

渭水ハ鏡色ノ如ク、中ニ鯉ト魴ト有リ。偶一竿ノ竹ヲ持シ、釣ヲ懸ケテ其ノ傍ニ至ル。微風釣糸ヲ吹キ、嫋嫋トシテ十尺ノ長サ。誰カ知ランヤ魚ニ對ヒテ坐スルヲ、心ハ無可郷ニ在リ。昔白頭人有リテ、亦タ此ノ渭陽ニ釣ル。釣人魚ヲ釣ラズ、七十ニシテ文王ヲ得タリ。況ヤ我ガ垂釣ノ意ヲヤ。人ト魚ト又兼ネテ亡フ。無機ナレバ雨ツナガラ得ズ、但ダ秋水ノ光ヲ弄ブノミ。興盡キテ釣モ亦タ罷メ、歸來シテ我觴ヲ飲マン。

素堂は中国の漢詩文において、「蓑」が伝統的に漁翁・隠者を象徴するものとして詠まれるところから、「蓑虫」を連想したのであろう。その蓑を着た隠者としての生き方は、「だれかいふ。駟馬の事ハ、むかし、一蓑の風流に及ばず」とあるように、王侯・貴族などが乗る駟馬の車に身を託すような富貴な生活も、一蓑の風流、つまり、隠者の生活には及ばないものであった。「太公望」は『史記』（「斉太公世家」）に出る人物で、釣りをしている途中、文王に呼び出されてその師となる人である。隠逸たることに価値を認める素堂の思想が窺える。

【六】においては、「虫合の歌に／□露をいとひてきたるミのむしも玉虫故に袖ぞぬれける」（典拠不明、自筆頭注に注記あり）――素堂の自筆頭注が付されていない『風俗文選』所収の『蓑虫説』を底本にした従来の研究では、玉虫と関わる俳文の該当個所として、『玉虫の草紙』をその典拠として指摘している――や、紀貫之の「雨によりたみのの島をけふゆけど名には隠れぬものにぞありける」（『古今和歌集』雑上、自筆頭注に注記あり）、さらに遍昭が初瀬寺で修行中に、昔の妻が参詣しているのを見ながらも迎えず、一夜を泣き明かした後、着ていた蓑を見ると、蓑が血涙で染まっていたという『大和物語』（自筆頭注に注記あり）に載る話を各々引用している。そして、誰にもいわゆる「恋」の惑いがありうると語り、「蓑虫」を「かなわない恋」の主体あるいは「恋する虫」として捉えた。和歌において、恋と関わる「蓑虫」が、男女の「かなわない恋」「辛い恋」を表現する

媒介の役割を担うものであることは、既に述べたが、「かなわない恋」という点では、ここにおける「蓑虫」と共通すると言える。

【七】においては、素堂の自筆頭注に「夫木集　雨ふらば梅の花笠かりもせで柳にすがるミのむしやなぞ　同　桜がちりにまじるミのむし　同　やとしつる荻の心もいざしらで秋風たのむミのむしのこゑ」とあることから分かるように、和泉式部の「雨ふらば梅の花笠あるものを柳につける蓑虫やなぞ」の歌や、定家の「春雨のふりにし里を来てみればまくらのちりにすがるみのむし」の歌、そして寂連の「ちぎりけむをぎのこころもしらずして秋風たのむ蓑虫の声」の歌を踏まえて、「すがる」「かかる」または「鳴く」などのような和歌的伝統に根ざした「蓑虫」の詩的イメージを語る。そして木枯らしの後には、蝉が殻を残してどこかへ立ち去るように、蓑だけを残して潜んでしまうのか、それとも、殻も身もともに捨ててしまうのか、という形で文章を結ぶ。この結び方は、『列仙伝』[15]『列仙全伝』[16]などにおいて、ある人（仙人）の伝記を結ぶときに録する、「疎メレ身ヲ入テレ雲ニ而去ル」（巻之四「蘭公」）あるいは「後隠ニ九疑一莫レ知レ所レ終」（巻之二「緱仙姑」）（以上、『列仙全伝』）のような表現ときわめて似ている。さらに「うつせミに身を習ふや、からも身もともにすつるや」の文言からは、『列仙伝』『列仙全伝』などに見られる「尸解仙」――仙術を心得た者が身体を残して、魂魄だけ抜け去り、神仙になったもの。これには、遺体が蝉や蛇の抜け殻のように、皮だけになっていることもある――が思い浮かぶ。道教では「尸解仙」になる過程を、蝉の殻をもって「蝉脱」すると表現する。これらを考え合わせると、素堂は『蓑虫説』に、『列仙伝』『列仙全伝』などに載る仙人説話の表現を踏まえて、「蓑虫」を仙人に準えて表現しようとしたことになるであろう。

【八】については、従来の研究では「漢詩」と捉えているが、『列仙伝』などに見られる「賛」とした方がいいのではないか、と考えられる。『列仙伝』などにおける賛を見てみると、まず、ある人（仙人）に関する伝記が漢文として記され、次いで、その伝記の内容を反映した四言八句の賛が続くという構成が主流を成す。【八】の部分は別本とも四言の句によって記されており、その共通性が見える。

たまたま園で瞩目する蓑虫は、「雨に平然と対応する虫」、「すがる」あるいは「かかる」との和歌・連歌における「蓑虫」の詩的イメージを踏まえて、雨が降ってもゆったりと落ち着いている様（「従容トシテ侵レ雨」）、なお定まらなく漂うように糸を引いて風に乗る様（「飄然トシテ乗スレ風ニ」）として見られる。また、【四】において、「形の小さい」ゆえに「わづかに一葉得れば、其身をおほひ、一滴をうれば、其身をうるほす」という『荘子』の思想に基づいた蓑虫の趣を、漢文脈に「白露甘シレ口ニ」「青苔掩レ躬ヲ」と置き換えて、小さいものに自足する虫であることを称える。そして、「天許作シレ隠ト」として、天の許しによって隠遁する、「造化」に順う虫であることを示し、進んで、「我憐呼レ翁ト」と興じ、それがゆえに我は趣を感じて、蓑虫よ、お前を「翁」と呼ぶのだと述懐する。『蓑虫説』が、芭蕉の句への応えとして書かれたことを念頭に置くと、その「翁」と称さ

れた「蓑虫」には、日頃、素堂に「翁」と呼ばれながら交流を重ねていた芭蕉の姿が投影されていたと考えてよい。そのような『荘子』の思想に順応しながら生きる蓑虫への素堂の愛情は、野鳥に啄まれることを禁じる「諫メ二啄コトヲ野鳥ニ一」という表現、また、家の童に払いのけられることも制する「制スニ拂フヲ家童一ニ」という表現を生む。そして、『列仙伝』『列仙全伝』などに載る伝記の結び方と似通う「脱二簑衣ヲ一去テ」「誰知二其終一」と結び、蓑（殻）を脱ぎ、どこかへ飄然と立ち去ると、誰もその終わりを知らない存在とする。この結びは、当然、賛にふさわしく、俳文の結びである、【七】の「やゝ木枯の後は、うつせミに身を習ふや。からも身もともにすつるや」という「蓑虫」の趣を再び強調するものであり、仙人または無住の旅人・隠者などを連想させるものである。

以上に見たところを、和歌・連歌・俳諧（『蓑虫説』以前）における「蓑虫」の場合と比較すると、『列仙伝』などの構成にあやかった『蓑虫説』は、「鳴く」蓑虫（【一】）、「かなわない恋」または「辛い恋」をする蓑虫（【六】）、「すがる」「鳴く」「かくれる」蓑虫（【七】）、雨に平然と耐える蓑虫（【八】）などのように、和歌・連歌・俳諧（『蓑虫説』以前）における「蓑虫」の伝統に立脚し、それを下敷きにした蓑虫の詩的イメージもあったが、それとともに孝する虫（【一】）、何の役にも立たない「無能」「無才」のために天から授けられた命を全うすることが出来る虫（【二】【三】【四】【五】【七】）、そして「造化」に順って隠を成す隠者（【五】【七】【八】）あるいは仙人（【七】【八】）などのような『荘子』または道教の思想が託され、かつその思想を実践するものとしての「蓑虫」が浮き彫りにされていたのである。ここに先行文芸に見える「蓑虫」の意味を踏まえつつも、それ以前には見られなかった新しい「蓑虫」の詩的イメージが作り出されていると言えよう。

むすび

以上、素堂の『蓑虫説』における「蓑虫」の意味が、先行文芸たる和歌・連歌・俳諧（『蓑虫説』以前）に見える「蓑虫」とは、どのような違いや新しさがあるかに重点を置き、検討を加えてみた。

和歌・連歌・俳諧（『蓑虫説』以前）における「蓑虫」の用例は少ない。和歌ではその多くが、「蓑虫」の「蓑」の語からの連想により、種々な雨とともに詠まれ、それらの雨に平然と耐える虫、雨にも身が濡れない虫とされた。また、紅葉ば・枝あるいは「蓑虫」の殻の外見に相応しい質素な場所に「すがる」「かかる」ものとして捉えられた。語の取り合わせとしては、「蓑」の縁語である「笠」または隠者の雰囲気を漂わせる「かくれ」るという語とともに用いられる例が確認された。そして、恋と関わる場合には、「かなわない恋」「辛い恋」を表す媒体となって詠まれたのである。また本来鳴かない「蓑虫」は、『枕草子』の影響によって鳴く虫とされ詠まれていくこととなる。そのような和歌で詠まれていた「蓑虫」の詩的イメージは連歌にも一部分的でありながら継承され、「出家する」「隠れる」、または「雨に対しての備えが万全な虫」「粗末な服を着ている虫」

「雨を連想させる虫」としての詩的イメージで詠まれていったのである。そのような和歌・連歌における「蓑虫」の詩的伝統は、俳諧（『蓑虫説』以前）にも継承され、「すがる」「かかる」「鳴く」「出家する」という意味を持つ「蓑虫」として捉えられる。

そして、『列仙伝』などの構成にあやかった『蓑虫説』になると、和歌・連歌以来の「蓑虫」の詩的イメージを踏まえつつ、何の役にも立たない「無能」「無才」がゆえに天から授けられた命を全うすることが出来る、との「無用の用」を持つ虫、そして自然の摂理たる「天」・「造化」に順って隠を成す隠者・仙人のような新しい意味を持つ虫として詠まれる。和歌・連歌・俳諧（『蓑虫説』以前）に見える「蓑虫」に見られなかった「蓑虫」の新しい詩的イメージがここで作り出されたのである。

そのような新しい「蓑虫」の詩的イメージは、その後、どのように芭蕉や蕉門の人々、さらにはのちの俳人達に受け継がれていくだろうか、この問題については稿を改めて検討してみたい。

【注】

（1）『新編国歌大観』に全二七首、『私家集大成』に全二首の「蓑虫」の語の用いられた用例が見られる。以下、本稿における和歌の引用は『新編国歌大観』による。

（2）日本古典文学大系19『枕草子　紫式部日記』（岩波書店　一九七三年十月）、九二頁。

（3）山根清隆編『菟玖波集総索引』（風間書院　一九八三年五月）、山根清隆編『新撰菟玖波集総索引』（和泉書院　一九九一年五月）、新潮日本古典集成『竹馬狂吟集　新撰犬筑波集』（新潮社　一九八八）、勢田勝郭編『連歌の新研究　索引編（宗祇の部）』、千句10種、百韻111種、句集・論書・紀行等計23種（桜楓社　一九九六年二月）、『連歌の新研究索引編（肖柏・宗長の部）』、千句11種、百韻120種、歌仙2種、句集・論書・紀行計26種（桜楓社　一九九五年二月）、『連歌の新研究　索引編（七賢の部）』、千句12種、百韻68種、句集42種（桜楓社　一九九三年二月）を活用して用例の検索を行った後、引用においては、荒木尚他三人編『千句連歌集七』所収、「伊庭千句」（古典文庫　一九八五年十二月）や高橋喜一他三人編『千句連歌集三』所収、「宝徳四年千句」（古典文庫　一九八一年二月）に載るものを参照した。

（4）『文選』（『文選索引』上・下　中文出版社一九七一年四月）『白氏文集』（『白氏文集歌詩索引』同朋舎出版一九八九十月）『古文真宝』『三体詩』『錦繡段』（以上三点、『影印仮名つき錦繡緞・三體詩・古文真寶』所収、クレス出版　一九九二年三月）『和漢朗詠集』（『和漢朗詠集漢字索引』勉誠社　一九八八年七月）『梅花無尽蔵』（『梅花無尽蔵注釈』、続群書類従完成会　一九九五年七月）『禅林句集』（『定本禅林句集索引』貞享五年本　禅文化研究所　一九九一年六月）『老子』（『老子逐字索引』商務印書館　一九九二年九月）『林羅山詩集』（『林羅山詩集』上・下巻　ぺりかん社一九八八年七月）『文華秀麗集』（『文華秀麗集索引』和泉書院　一九八八年十月）や陶淵明（『陶淵明詩文総合索引』彙文堂書店　一九七六年十二月）・杜甫（『杜詩五種索引』上海古籍出版社　一九九二年。五種は『全唐詩』『杜詩詳注』『杜詩鏡銓』『銭注心解』『全唐詩補遺』である）の全集を検討した。さらに中華書局・現代出版社・天津古籍出版社・社会科学文献出版社共同刊、『全唐詩索引』を参考にして、王勃・楊炯・盧照鄰・駱賓王・陳子昂・張説・宋之問・李白・張九齢・王昌齢・劉張卿・孟浩然・李益・盧倫・韋應物・岑參・高適・銭起・劉禹錫・王建・柳宗元・王維・張籍・元稹・寒山・拾得・韓愈・孟郊・李賀・白居易・賈島・杜牧・李商隠・韋庄などの全作品を検討した。一方で、素堂が儒学者であることを考え、「二十四史」（台湾の中央研究院計算中心（インターネット）を利

用）と「十三経」（『十三経新索引』中国広播電視出版社　一九九七年四月）とを検討範囲に入れた。

(5) 大谷篤蔵編『謡曲二百五十番集索引』（赤尾照文堂　一九七八年七月）によって検討した。

(6) 京都史蹟会編『林羅山詩集』（上・下巻　ぺりかん社　一九八八年七月）翻刻本を用いたが、訓点は底本のままにする。

(7) 古典俳文学大系『貞門俳諧集一』『貞門俳諧集二』『談林俳諧集一』『談林俳諧集二』（以上、集英社　一九七〇～一九七二年刊）、『校本芭蕉全集』（富士見書房）、『宝井其角全集』（勉誠社　一九九四年二月）所収の全作品を対象とした。結果、『貞門俳諧集一』に一例、『校本芭蕉全集』に一例、『宝井其角全集』所収の旨原編『続五元集』に一例が見られた。但し、『続五元集』の貞享三年の条に見える一句は、貞享四年十一月刊、其角編『続虚栗』の「春の部」にも見られることから、『続虚栗』から引用した。『蓑虫説』は貞享四年、秋の作。また、『蓑虫説』が成る前に詠まれた素堂の「簑蟲やおもひしほどの庇より」「みのむしにふたゝびあひぬ何の日ぞ」の句、それに相応じた芭蕉の「簑むしのねを聞に來よ草の庵」の句も、検討すべき範囲に属するものであるが、「蓑虫説」を含め、「蓑虫」をめぐる両人の唱和の中に見える句々であるため、次節（三　「蓑虫説」における「蓑虫」）において触れることとする。

(8) 阿部正美『芭蕉連句抄』第四篇（明治書院　一九七六年五月）四七二頁。

(9) 原本の焼失のために、『俳書集覧』・六所収（松宇竹冷文庫刊行会　一九二九年五月）の翻刻本を参考にした。

(10) 『俳句講座』・5、「俳論・俳文編」、明治書院　一九五九年

(11) 新編日本古典文学全集『松尾芭蕉集』・2、小学館　一九九五年

(12) 古典研究会叢書『史記』（汲古書院　一九九六年）所収、国立歴史民俗博物館蔵本、影印による。

(13) 『荘子虞齋口義』（古典研究会出版『和刻本諸子大成』所収、寛永六（一六二九）年　京都風月宗知印本）を参考にした。以下の『荘子』引用は、すべて同書による。

(14) 『白氏文集』（元和四年（一六一八）刊本）、影印による。

渭上偶釣

渭水如鏡色。中有鯉與魴。偶持一竿竹。懸釣至其傍。微風吹釣糸。嫋十尺長。誰知對魚坐。心在無可郷。昔有白頭人。亦釣此渭陽。釣人不釣魚。七十得文王。況我垂釣意。人魚又兼亡。無機兩不得。但弄秋水光。興盡釣亦罷。歸來飲我觴。

(15) 『列仙伝』にならったと思われる『本朝神仙伝』『扶桑隠逸伝』『本朝遯史』『列仙全伝』『本朝列仙伝』などが、すでに『蓑虫説』が成る前に出版されていた。従って、素堂は、『列仙伝』が和刻本とされる前に、舶来されたものを読んでいたと考えられる。

(16) 『有象列仙全伝』慶安三年（一六五〇）刊本、筑波大学中央図書館蔵。但し、これには賛が付されていない。『列仙全伝』は『列仙伝』に登場する人物（仙人）に、さらに、別の人物（仙人）を追加したものである。

※付記

稿を成すに際しまして、清登典子先生・犬井善壽先生・谷口孝介先生の御指導を仰ぎました。また、本稿は『日本語と日本文学』に投稿中、俳文学会東京例会（平成十二年十二月、於青山学院大学）において口頭発表したものであり、会場及び私席でいただいた多くの御教示・貴重な御意見を反映したものであります。記してあつくお礼申し上げます。

（ファン　ドンウォン　筑波大学大学院博士課程　文芸・言語研究科　学際カリキュラム）